

兵の災に遭ひ観音菩薩の像を信敬ひて現報を得る

縁 第十七

伊予国越智郡の大領の先祖越智直、当に百済を救はむが為に軍に遣到さるる時に、唐の兵に擒はれ、其の唐の国に至る。我が国の八人同じく一の洲に住む。儼観音菩薩の像を得て信敬ひ尊重ぶ。八人心を同じくして、竊に松の木を截りて以ちて一の舟とし、其の像を請へ奉りて舟の上に安置き、おのおの誓願を立てて彼の観音を念ふ。爰に西風に随ひ、直に筑紫に来る。朝廷聞きたまひて召して事の状を聞きたまふ。天皇急に矜みたまひ、樂ふ所を申さしめたまふ。是に越智直言さく「郡を立てて仕へむ」とまうす。天皇許可したまふ。然うして後に郡を建て寺を造り、すなはち其の像を置く。時より今の世に迄るまで子孫相統ぎ帰り敬ふ。けだし是れ観音の力にして信ふ心の至なり。丁蘭の木之母すらなほし生ける相を現し、僧の感りて画ける女すらなほし哀ふる形を応ふ。何にいはむや、是れ菩薩にして応へざらむや。

第十七縁 善業についての現報説話。今昔物語集・十六ノ二に書承。

一 愛媛県越智郡、今治市あたり。二 名未詳。本説話以外に所伝をみない。三 六六一年、出兵。六六三年、白村江の戦。「百済を救ふ」戦とされた。唐軍に捕えられて虜となる者が多かった。四 於天豊財重日足姫天皇七年、救百済の役、汝為唐軍見虜(書紀・持統天皇四年条)、「初救百済也、官軍不利、刀良等被唐兵虜、没作官戸(続日本紀・慶雲四年条)。

四 原文「至其唐国」。「其」は「於」の意か。

五 「儼タマ／＼、タマサカ」(名義抄)。底本訓積(儼「多半良止之天」は誤釈。六 底本訓積「截(支利天)」。七 天智天皇。八 今昔物語集・五ノ一に、五百人の商人とともに羅刹国に漂着した僧迦羅が観音を念じて白馬に助けられ、のちに羅刹国を亡ぼして僧迦羅国を建てた、という説話が伝えられている。観音・渡海・建国、というイメージの結びつきは、本説話の観音・渡海・建郡、というイメージの結びつきに共通するものがある。九 孝子伝にみえる。若くして母を亡

(五) つた丁蘭は木を刻んで母とし生けるがごとく仕えたが、隣人が木母(母)の一臂を斬ったところ血が流れ地に満ちた(京大本孝子伝)。

三 未詳。「如丁蘭木母、猶現生相、僧感画女、尚応哀形、何況是菩薩而不応耶(十一面神呪心経義疏。中村史の指摘による)。

遭¹兵災²、信³敬觀音菩薩像⁴、得⁵現報⁶緣第十七

伊予国越知郡大領之先祖越智直、当為⁷救⁸百濟、遣⁹到軍¹⁰之時、唐兵所¹¹擒¹²、至¹³其唐国¹⁴、
 我国¹⁵八人、同住¹⁶一洲¹⁷、儼得¹⁸觀音菩薩像¹⁹、信敬尊重、八人同²⁰心、竊截²¹松木²²、以為²³一舟²⁴、
 奉²⁵請²⁶其像²⁷、安²⁸置舟上²⁹、各立³⁰誓願³¹、念³²彼觀音³³、爰隨³⁴西風³⁵、直來³⁶筑紫³⁷、朝廷聞之、召聞³⁸、
 事狀³⁹、天皇急⁴⁰、令⁴¹申⁴²所⁴³樂⁴⁴、於是越智直言⁴⁵、立⁴⁶郡欲⁴⁷仕⁴⁸、天皇許可⁴⁹、然後建⁵⁰郡造⁵¹寺⁵²、
 即置⁵³其像⁵⁴、自⁵⁵時迄⁵⁶乎今世⁵⁷、子孫相統⁵⁸、蓋是觀音之力⁵⁹、信心之至也⁶⁰、丁蘭木母⁶¹、猶現⁶²、
 生相⁶³、僧感画女⁶⁴、尚⁶⁵応⁶⁶哀形⁶⁷、何況是菩薩而不⁶⁸応⁶⁹乎⁷⁰、

1 軍(国)―運
 2 擒(国)―福

3 国(国)―ナシ
 4 一(国)―ナシ

5 聞事狀(国[問事])―◇狀

6 申(国)―中

7 之(国)―ナシ

8 也(国)―之

9 僧感画女(国[僧感尽女])―
 ナシ

10 哀形何(国)―ナシ